

## 認知症ケアの変遷と今

湯浅美千代  
順天堂大学大学院医療看護学研究科

### 1. 家族の介護負担軽減のための支援体制整備

1972年に発行された有吉佐和子著「恍惚の人」により、認知症介護の負担がクローズアップされた。福祉施策では、家族が介護を続けられるようショートステイやデイサービス等が導入されたが、認知症の人にどのような対応がよいのかは明確になっておらず、手探りの状態だった。

### 2. 認知症の人のQOLを高める環境の視点

高齢者が長期に入居する施設は大規模で、認知症の人が自由に歩くことができるよう回廊式が求められていたが、1990年代に入り、グループホームの小規模で家庭的な雰囲気、慣れ親しんだ環境の有用性が広まり、大規模の施設でもユニットケアができるように改修やスタッフ教育が進められた。

### 3. 認知症の人本人主体のケアへ

2000年代に入り、「パーソン・センタード・ケア」の考え方が日本にも導入され始めた。2004年に京都で行われた国際アルツハイマー協会第20回国際会議では、認知症の人本人が自身の経験を話し、ここから「本人主体」の考え方、本人発信が広まってきた。2024年1月に認知症基本法が施行され、認知症の人が尊厳と希望をもって暮らすことができる社会の実現が目指されている。

### 【ご略歴】

千葉大学看護学部講師等を経て、2004年に順天堂大学医療看護学部助教授として着任。2013年4月より現職。1995年の日本老年看護学会設立時より事務局を担当。2024年6月より一般社団法人日本老年看護学会理事長。